

絆 求 め て

7月2日発行

文責 私学振興専門員 久保田学



春季公開講座を実施しました！

令和3年5月8日(土)、信州大学医学部教授 本田 秀夫先生を講師としてお迎えし、春季公開講座をWEBで実施しました。テーマは、「発達障害の理解とインクルーシブ保育」で、内容については、①発達障害とは ②知的能力障害と知的発達症について ③発達障害への療育 ④自然体の子育て ⑤インクルージョンとは ⑥自律を育てる保育 などについてお話いただきました。土曜日の午前中の研修にも関わらず、309名の先生方のご参加をいただきました。先生の講演後にチャット機能を活用し、日頃の保育で悩んでいることや疑問に感じていることをお出しいただき、講師の本田先生から全ての疑問に丁寧にお答えいただきました。以下に研修後のレポートでお書きいただいた内容とチャットでお出しいただいたQ&Aを紹介します。

＜研修から学んだこと＞

- 発達障害の「異常」とはなにか？「やらない」異常、「やる」異常、目に見えない異常の3つがある。目に見えない異常は保育者から見逃されやすい。目に見えない異常とは、一見すると他の人と同じように振舞っているのに、他の人が考えないことを考えている、興味はないがしかたがなくやっている、やりたくないが嫌と言えない、わかっていないが他の人の真似をしてやる。この異常への対応が大切。
- 発達障害の子が生活しやすい＝全ての子が生活しやすいという言葉が印象に残りました。どの子にも、生活しにくさを感じさせない保育をすることが大切だと、改めて考えることができました。障害の「特徴がある」「診断する」という判断は、そのことによって社会生活に支障があるかということだと学び、診断がなくても特徴があったり、自分の中で生活しにくさを感じたりしている子もいるのかもしれないと考えるきっかけになりました。だからこそ、みんな出来て当たり前・できる前提で保育をするのではなく、一人一人を理解し、のびのび過ごせる環境づくりを心がけたいと思います。
- できないことをさせようとするのではなく、できることを伸ばしてあげ、「できた」という経験をたくさん積んでいくことが大切なのだと感じました。

＜今後の保育実践に生かしたいこと＞

- 子どもたちへの見方や視点、捉え方が変わりました。今年度受け持つ学年の子どもたちは本当に様々なお子さんがいて、支援の方法もそれぞれに違い、頭を抱える日々です。それぞれに合ったペースで、完璧を目指さず、その子が心からやりたい！楽しい！と思える活動を考えたり、とことん遊び込める環境を作ったりしていきたいと思いました。
- 目に見えない異常に対しては、家庭や園の様子を観察しながら、その子が苦しい思いで集団生活を送らなくて良いように、気をつけて配慮していきたいです。個別に何かをお願いして、自分で考えて動けるかを、各所で試してみたいと思います。叱らない保育に対しては、わかっているけどついこちらの意向に沿わせてしまいがちなので、トラブルや問題が起きたとき、まず叱らないためには…と一旦深呼吸して考えて環境を作っていきたいと思います。
- 障害をもっているお子さんには、その子に対する援助も大切だが、保護者にとっての援助も、保育者としてしっかり行っていきたい。自然体の子育てを園でもできるように、私自身が心掛けていきます。
- 誰もが分かりやすい時間になるよう連携を深めながら進めていきたい。子どもから学ぶことが非常に多く、実践し、上手くいかなかったことは修正をかけながら、いつも子どもを中心に置いて過ごしていきたい。更にこの考えが園全体の目標になり、同じ価値観や、考えの中で生活できるよう努めていきたい。

本田 秀夫先生の講義での質疑について

Q1 ABAについて

☞ 応用行動分析は、行動を数量化して、どんな条件であればどんな行動が、どの程度出るかを蓄積していく学問で、今日の視覚的構造化は応用行動分析の中の1つの方法と言ってよい。発達障害での支援にはこの分析が生かされているものが多い。今日紹介した中にもこの分析の考え方が入っている。

Q2 クラスに能力的には定型発達の子と同じように行える子がいます。しかし生活面でできないことが多い子です。例えば、周りのことに気が行ってしまい支度が進まない、排泄面でまだ失敗があるなど。能力的にでこぼこしている子への対応は、どのようにすればいいでしょうか。また、その子の保護者へのアプローチの仕方はどうすればいいでしょうか。

☞ ADHD、学習障害の子によく見られる。できることは多いがムラがあるタイプ。周りのことに気が行ってしまふので、まだこの子にとってこのような状況下（周囲から様々な刺激を受けやすい状況下）で支度ができるようにしていくのは早い。どんな条件が揃えば支度が今よりもスムーズにできるかを考えたい。しきりを作り周りに目がいかないようにするなど、場所、環境、目に入る物を工夫する。それでも改善しない場合は、まず身に付けさせる事は何かを段階を区切って絞ってみる。このようなお子さんの親に対応する際は、ではできている事、ここはまだという事を明確にして淡々と伝えていくことが大切。

Q3 幼稚園では自分でトイレに行って排尿ができるが（男子の便器）、家では「匂いが嫌だ」「手に付くからいやだ」と言って母親にすべてを手伝わせている。母が「自分でやって」というと「なんでどうして」と言って、押し問答になる。母親は大変困っています。家ではどう対応したらよいでしょうか。本児は4月1日生まれの5歳児です。よろしくお願いします。

☞ やれる能力があるが嫌がってしまう場合には、手伝ってしまっても構わない。そのまま大人になることはない。保護者に、園では出来るのに家ではできないことを伝えていったとき、母親は自分の育児力を問われていると考え、コンプレックスを感じてしまうことがある。子どもさんは、外の世界では張り合いがあって一生懸命にやるけど、家ではやらないというケースは沢山あることを伝えていきたい。園ではこのようにやっていますから家でもこのようにしてくださいと伝えたと、保護者がコンプレックスを感じてしまうことがあるので注意していきたい。

Q4 自然体の子育てについて、伸びるのに時間がかかりそうなことはやめておくと思いますが、幼児期ほどのくらいが目安になりますか？

☞ 時々確かめるためのアプローチをし、本人がくらくらいついてくるときが伸び時と考える。チャンスを与えるけれど、押しつけをしない。

Q5 園の行事や発表会等で、発達障害を持つ子にとって課題の大きいものを求めてしまうことがある。そのため、保育者はその子に合わせた方法を考えてやっていくが、保護者は周りの子はできているのに自分の子は・・・と捉えてしまう。どこまで私たちはそのようなお子さんに求めたらいいのか、保護者対応はどのようなものか課題と感じている。本田先生のお考えをお聞きしたいです。

Q6 園で我慢してしまい、家庭で発散してしまったりしてしまうこともあるというお話がありました。やはり園でも、他の子に埋もれてその異常に気づけなくなってしまうことも考えられると思います。目に見えない異常に気づくためのポイントや気を付けることを教えていただきたいです。

☞ すべての親御さんを対象とした説明会や保護者会で、園でやっている事を楽々こなせる子はいないと話をして欲しい。それは、能力の問題だけでなく、興味の問題、本人の好き嫌いの問題である。園では様々な活動をするが、興味が持てる子もいれば、そうでない子もいる。園では1つ1つの事例について情報交換し共有してもらいたいと、保護者に伝えて欲しい。また、園でできなかったからと言って、家で練習する必要はない。園でどのような工夫をしたらそのような変化があったか（うまくいったか）を親御さんに伝えて欲しい。また園での対応でどうしてもうまくいかない、どうして良いかわからないことを家庭と共有して欲

しい。場合によっては発達専門の所で相談し、情報を園にも伝えて欲しいと話していただきたい。

Q7 しつけの厳しいご家庭に対し、園での様子を良いことも含め少し気になる姿をお伝えすると、逆に家庭で厳しく指摘されてしまうのではないかと心配しています。

☞園での課題を家庭に伝えると、委縮して過剰適応してしまう場合がある。担任だけでは手に負えない場合は、管理職も関わり対応したい。また保護者には、「園でできない事は園で対応しますので、家庭で特訓するのは止めてください。」と伝えて欲しい。

Q8 クラスの中にいる何人かのグレーゾーンの子どもたちの興味や関心、活動意欲を優先させるとすると、その他の子どもたちへの示しが見えない場合もあるような気もするのですが、どのように対応したらよいでしょうか。

☞これが我々大人の無意識な差別意識である。園では皆が楽しめるようにと誘導してしまう。20人いて19人が楽しめていれば、残りの1人は楽しめていなくても良いとする。しかし逆に、1人が楽しめていて19人が楽しめていないことには抵抗を感じてしまう。この意識が差別。1人のために19人がつき合うことも大切。先生方はそうするとクラスを乱すと考え、20人全員向けのカリキュラムにしてしまう。その事に気づくことが今日のテーマ。19人+1人すべての子を満足させたいと考えるならば、加配が必要。多数派の子どもと同じ活動をしようとしても持たない。この時は別行動が必要となる。同じ場所で活動していても、別のプログラムで対応することが大切。そのような子への対応で、「どうしてもここにいたくないのなら、いなくて良いよ。」と言ってしまうことがある。それは放置に他ならない。あらかじめその子の反応を予測して、みんなはAのプログラム、〇〇さんはBのプログラムをやるという計画立てをしておく必要がある。計画的にやるのであれば、同じ場で別の事をするのに何ら問題はない。もし加配の先生をつけてもうまくいかない時には、親御さんと話をし、発達専門の場に通うことも考えてもらう。

Q9 発達の遅れている子に対して、周りの子がそれに気づき疑問をいだいたりしている場合の声掛けを教えてください。

☞知的に高い子は、そこに気づいてそのような質問をする事は考えられる。その時に、「ああそうなんだ。」と言ってさっと納得できる対応をしたい。その子をバカにしたり、低く見たり、そのような反応にならないようにする事が大切。誰でも苦手なことや嫌なことには積極的にならない。あの子にとっては今やっていることがそうなのだと分からせる。皆がやっているのに参加しない、「その子はその事が苦手だから、あまり好きでないからなんだよ。」と言う。大切なのは、他の子も好きでない事や苦手な事の際には別の事をして良いことを保障すること。なぜあの子だけとこだわる子もまた、支援の必要な子である。

Q10 やりたいことを尊重し、待つことや見通しが大切であると改めて感じました。しかし、次の活動がある状況で、でもやりたい！という思いが強く、切り替えが難しい場合、泣いて切り替えるということが多いです。その子のやりたかった気持ちを受け止める事で次にうつれる場合は、対応としてこのままで良いのか悩んでいます。泣かずに切り替えられるのがベストだと思うのですが…

☞絶対に加配が必要な子である。8~9割の子は先生が言えばついてくる。「時間が来たから、先生が言ったから」では動けない子がいる。そういうお子さんの場合は、その子にとってきりの良い時しか切り替えはできない。そのタイミングは本人しか分からない。それを見抜ける加配が必要。「やりたかった」というその子の気持ちを受け止め、その子の気持ちを言葉にして共感的に話をしながら次のことに移っていきたい。

